東西報話

中

利
1141
2

東西雷話中

今年のこの稲の穂のこの稲の穂のこの稲の
月と見るやうに風さやかなるのり
さきうつるやうに稲穂に出でたる日のそのかたち
なりぬさまの秋風の吹きぬけ稲穂の今は波の
なりとなりし稲穂のさまは波のうねりこそ
うつさるるかのおもむきはいつこそ
くもはなれうたは波れうたは雲のさまひとつ
のんちがいるこかこの波はこそやはうむ

宗教大学図書

[illegible]

南もきくに[illegible]の事

奥津

秋思亭

[illegible]よ奥津の秋をば

乙運亭

此者[illegible]や五十年此秋をも[illegible]風然

[illegible]

その[illegible]

[illegible]

[illegible]時

[illegible]

[illegible]秋海棠

[illegible]の曲[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]秋海棠[illegible]

[illegible]

[illegible]

而村の西に赤王寺あるをそ経る所に
地を観世音に昊蹤みする名るに清水の
流いといさぎよく流れ水月の乃坂とて
彩色をて孫馬に秋の清水流れ

泊といふ所を七里はかりあるを経て
杉の苔むす風雅のつさ清く
さらに城風しくに地のくさ芝ふる
一ふるをさるる事の侍りゆうまるを
泊りといひしやさられこの夢

乙大力菩薩滝 寺泊

芝のをふるやさしよ毎のふるれ

乗法

雅波津より佛弥の山さそ
ふうしよ中の二月初ふる
ある人のいふ所なる小地の所に佛弥者
山陸に自殺あり
侍りしとかさ名月に自
と法師日連ふの所に来て紀法

そもそもいく程遠国の梅の名所とうたはれ
の山桜とかきたりたる歌俳諧の作さとい
世のうたをあつめたるつゝみ連歌もさいくおかた
さ屋ものあるこゝろもなくしたゝかなる
のんとうの風流にかなひたるとも
とゝ見るあもしの時をこゝ意味をあらはす
感ずるこゝさいうかたるかはいはゆる俳諧
風屋しを師つとゝ世をこゝ命をとりく
矢月のこゝとゝ見るこゝ梅をこゝ桜ハ
ちらしたるこゝの世の地をこゝ本郷のもとゝ
かしもとの梅ハ紅をこゝ連歌ハ古語
歌をまるハいくのさひ高ハんもこゝ俳諧
こゝ川の命こゝ頼政の白川の命こゝ宮部の
と宮部ハ別をこゝ世代の音をこゝ
名ゐちとるこゝ行基ゐのとゝ
海をこゝさる文字をこゝ

名録

こゝ屋乃梅こゝる節　乙運
本こゝ屋の墨のこゝ梅の
簾掛や和の色出る小伏　外故

[illegible]の[illegible]の市　如水

[illegible]又てらてらとかんこう

[illegible]の[illegible]の月　雨村

[illegible]帰の[illegible]の[illegible]

大名し[illegible]こうれ　秋蓬

[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible]　仙猿

[illegible]の[illegible]

浪人の[illegible]の柳うれ

[illegible]の[illegible]の[illegible]　包之

[illegible]

[illegible]　心汁

[illegible]

[illegible]の[illegible]　水聽

[illegible]の[illegible]

[illegible]の[illegible]　松子

[illegible]

[illegible]　未及

[illegible]　如言

島つたの山に枝さして　仙居
十とせ経ぬるいやさ枝振　如口
水流れ船筏の出入の所　以白

今日を美はなり富山のつるの姿むしくふ屋
うら狩の徳のあらくれよりはきるをいと涼と
いひを穂ハ島よりはきさらるおのこの教みれ蓮
狩といふもの仏すやと倶利迦羅
さあつまりを世の中かくくきをとりの形
さる我他清師乃ちるる稲荷の弓井
敷きくんとつるのくちるをいくらハ

新山寺の西富田やしろの秋
富田山
立山と清の山を流れを流
富田山
此地の人くなふ出むしてちりちる小屋
をを新ちハ流水を駅路の宿の名
相の面ハ月ハ蔦つく鳥の
ちしを塩かの清新ふいをや波を踊まる。
相俗いをあ初ふさハ清の人　あるる人
二川亭　皆戸有秀

唐崎の松のかげうしなひて市は秋

山王　酒折宮奥の社

神垣の深き色も秋のうち

鳥居の赤敷いけ地の彩色ひとしく人も拝殿に

もたれし跡のおもかげ　郊外の雑居を

かりそめの雪ちらす風　地は東南

の高きまさる秋の色　山のを山のうてを

おのづからなる秋の色　秋の暮の

百別宮　柳宮奥の社

舟はつの秋やはるの雪

秋をこの移り坂や神の明かり

夜話

ある人俳言をいふ句をいふ法師

曰ふ芭蕉門ふ俳諧ふ俳言

俳言句といふ俳諧ふ

あるべんも俳諧を俳諧の人あり連歌は連歌

はあるべし言葉はかりのものの俳言

強弱ふ連俳のもの一句も法

師の俳諧ふ時を先俳諧を社

かゝる発句を誹諧なりと見ゆる人もおほくといへ
ずまた紹巴の作るや何がしのめでたき発句を
法師は一生連歌をもて業とし出て手すさびに
誹諧なりとも花実を深く心のはしに
本歌の昆若をさゝする発句と聞えしかば その
実をはなれしをとかくいふにも法師が口連俳の差
おあるへし人が誹諧ゆゑと思ふは連歌のに
ちかき誹諧の人をまねといふは誹諧のかぎり
やさしき人のなかは境を見てより人行ちがひ
言葉の其の発句も誹諧とおもふ法師があまた

とりともつゝしみれは本歌の証言をもいふへき
ゆゑにいまは
之師より出しも用し名をよみ発
うちの見所すくない事がある
世の人誹諧を打越てするめときこゆ一身之の差
絶ところ紙上は人のこゝろ誹諧の発句は文之の妙を
と書しく後(?)之此所好書む発句は一句の曲にて
もの(?)なし
こちの見所よんは事があれ
是は孤乃さゝされ侯はゞ

谷深

秋寒ゆ仰て西の方新　二川

空のひそいよ〳〵冴る雁れ

嫁入〳〵ゆく池もよ冬枯の色　芝道

あ〳〵ふやさ西〳〵紅白乱

こ〳〵つ〳〵こ〳〵文字なる山茶花　一康

ぬんさん乱浄瑠璃の かなれ

り乱れ動てあけさ冬の色　梅子

ひ〳〵乱毎の二階〳〵ふ乱れ

冷ゆ〳〵し牛し山牛清水乱　白糸

行秋の峠〳〵迎ゆ〳〵ふ

言園

十丈の仰葉六〳〵せけさ乱人いせのほう

重しけ〳〵冷〳〵冷〳〵ふ乱を山田の葉山ふと

小ふ蔵ふの名ふし〳〵ふ多ふの出ふ〳〵

笠ぬ〳〵ふ見西〳〵ふ乱を葉山る

野角立〳〵ふ屋ふを

深〳〵ふ〳〵ふと屋ふ川ふ於乱

美吉寿彩　於笠五兵衛

端ハあり／＼梅さ菓ハ寒江の島かれ

丹岫亭　酒家や

新酒の名もよき名もあり雲の月

河菱亭

秋ものや千秋の花露のちらしかれ

此句ハ木の秋わかんといふ人もあれど
萩薄の様相にうつる風情
ハ人のこゝ論ハきゝうまやあらむ

少人亭ふよき雲のあるし待りしに父の形見
とて人まゐらせやとて歌よみ贈りけるとかくし
梅かゝしまましみちよらの色やとむく秋の

わか殊に深し

ふりやよしある花の庵の雲

布袋賛　虚舟画

清さこゝ西の暮の中に秋の声

来融子画

むかしく人も練ゆらし　芭蕉

清紙画に画一先師の讃多く四句もありと承く
連斗翁か研けにも教ねよく人にもつくりて室に
ふも雲ミやともいへ月の不覚観と年ふゆて

さる格式ある人をも蔑ろ
にする様なりとおもふ
おもふ事あるまじくいなせるうらし
ろ程月をも目あてにあ
なるよりつゝいとあはれ
よいさもあるものにて世人おの程の世間あ
きをぶしみぬ所かまはぬ男女の
情し初の程の男女はいとうるはしき事
もつきぬべきおりのやさしき人目よりをも
物の又からのうれひ
かゝあるまじきもそなたなるべき月は雲まう
えもいとかゝはしの恋の絶まおもかへ
深名をうゝ人はけ白古伊勢の家わせ
を程きりとしきりとしてもあ古
清古かゝるも程なる事もあるやうのもあ
俳諧はあんの物あるふしひちとよあるをも
詩をかゝるがりとしい足人の海列あい
を物かくこをもはかりて古物古をもて
祝とせおりをすまるあるとしいい古人の物を祝
かりをかゝ不月世かゝる事あるこをもを師のん

夜月のひかりをかくすときハおもしろからぬ雲の
ありかく猶ハ月に似たる出るといふ事に
て猶よ柳の花をも見る人よおもしきハ
月雪花郭公を友としおもしろ父もおもしろ須
家しめ枯かくさしものなりくるといふみれ
とらし人を遊ばせしおもしろ四季の人あき
出でのものおもひ侍りしはあはれおもしき時ハなめ
ゐしきて出るしき時ハはなあはれつきし
いふもしろしかなしく人をまよはさる猶ハあはれい
宗一抱のくるりとて月ならし猶いさぎよし

ものなりとて稽古ハ烏の法なるにハいさる
ゆゑにしく心得なきてなほしふくるものなる
発句も俳諧をするときハ老荘釈迦孔子も
其のさまなるをしらしむる文章をたてる時ハ人の文人
宗祇宗長も文章のさまなるを日々備なりけらし
芭蕉より俳諧の上をあらはしやそ師匠を崇
かゆる君臣の如くにハかの月見の句離しる人に
わかしくかねれたりと

東花坊

求聴文

要語

あるひとのいはく新まへの韻字と留りとハ郭云
枯野といふ類ニくこもれる物にとある点志
付けたる発句ニ付る事ニ侍りや法師の曰其
次也この句ハ揃ニ其証を叙べて付句を考るニ其の
わけよき句にかかりて付句を始めて仮寝の
信不信をよくわかちて付句を兼ねたる前句にハ
前句の留りをうけ付まへにハ付まへ也とかく前句に
平句也次第と曲尺の二通りあれこそハ平
万句也中にかはまをかへて前句ハ前句付まへハ我まへ

ふりまへの姿をきて附まへハの字ニくとくの字
にくし付まへハよ附にくしく韻字ハ一字落や
先師生前ニ附句さ法ニ附けし法師ハ小宗乃
紙幣ニ附ニ附方さまをつけ付句に好さを
あまりしく附句ニくし新ることに附まへさ成ハ
つまりの曲の後ハ其のまへいはよしきさゆ節と

そこ好むらう

雑子の出てくる鳴ハおもしろさも早いぬる
是のことさいをつくゆくりつまへそれ

射水川ㇾ

門の於堂の風をかくれなきの
津の国池田律丹と申すに
かくれ附方をおのれ付合すて附句は昔お家
つきあひかく附ぞんまさと句風改めるは
にわしまで次の付句を曽我つし
先師すおよ古風の附方にかへりしといふ富嶋氏
合しれぬ附方あしむやかさ給しも
この月の新に世に附そ侍る也
おのさ附方を伸をまとつも
是おそ於越の阿部むつかし於て其人の楯に

まわしまゐや先師の生前の無さひ変化あり
死後の変化もこそひとも新む口伝の変化さぶ
むつかしぬ附方にはなして洛大家の附変
この変化に続も知らつのよ

發句

八月十四日こそ此くまみ茶給ふ
も後の月の名むも立名れ
二上山の梯乗の光粉とおもむ
手綱をやさくら園のもとの名所

名稀

[illegible]　十丈

[illegible]　野甫

[illegible]　小人

[illegible]　市仲

[illegible]　河菱

[illegible]　丹岫

[illegible]　笈亮

[illegible]　乙双

年々の懐さしく猶ほ少　虚舟

廣瀬氏の宅にて二百年の秋

馬ひとつ引ほ捨たる月の月

谷かけのをさよ蛙の聲　巴三

湯あがりしらるはいなく蓼ふ

雲母の月うつやむとうつ　枝動

牛ほ出て角ほ寒し鶴の

ほ出ほ出ほ門ほ出ほ蒲の葉　周以

高き山ほ高き山ほ異しん柳の

蓮の葉ほ葉ほ葉ほ池の面　政之

吹ぬきに軒ほ風ほ灯籠ほ

消りかねさうにさうにほ蓼ほ　蘭水

七月の時雨とちらふとのされ

芭蕉翁の跡を求ム

芭蕉葉の葉ほ葉ほ葉ほ波の音ほ葉ほ　東白

有坂

多胡待月

おほつれ蓬ほ月ほ多胡の路

谷月遇雨

旨の紫ゆくるるみる後や面白月

[illegible]面の月を[illegible]

[illegible]月の樹の[illegible]

きゆきかしみあるもの

こ[illegible]の[illegible]月や法の[illegible]

[illegible]北枝と出[illegible]

[illegible]浦[illegible]

[illegible]の月[illegible]

[illegible]の月[illegible]

[illegible]

兼好の味[illegible]

[illegible]月[illegible]

[illegible]谷[illegible]月

十七夜[illegible]月[illegible]浦[illegible]

月[illegible]

あいの浦[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]浦[illegible]

やきのもて[illegible]

浦の松見し此亭のさゝら波
此浦に見ても名残いらこかれ
拾貝
松かけや加年かけて貝ひろひ
阿尼の搔青ときこえしおのこを先に蝶之里
そく楽の深山を見てそれぞれの人の風
雅の友をまねきしこも山里の海きこえつ
もとしたまへやとゆしさかくはおほ之秋は
割
竊ともなる趣に越乃まうくる

夜話
世の人此俳諧に於る趣は古しと趣は新しといふ事の
傍らに法師あるといへり兩者に於のいかさやうにいへは
諸風の全體を志らすしておのれかうたはれを
ならへ先にをあくまで知りてもおの趣をいかんとの
まうけ紀をつ常しく句を作りしは一句ふをそ
新しのさうしもあるへしさ趣は兩くの内て
はまりて似あはしき風へ化くはせゆくされ蕉翁
吟しく志る新しつおのの全體をえたる人はしく
るいは今古のいさむれに拘へるゝ古しと人にもなる

小あらはしなれどやがて新しきを求むれば
ハ其の善の俳諧の俳とそなるまじきかるが故
俳人世さらしハ大切の事也とそいふ事の
俳諧ふし

蕉門のたこつゆるハ詩しくさ
しくと記す所門の弟
かゝる古さ詩方し又一きの変化や一定み
こ句ともあらハ出る歌仙三十六変百
万顔ハ百変ふ一こ句是とともしきハ
新き自生の俳諧師といふ一新しよりのこ

句もしたがたんなるいる合吟みと古き歌
ふゝ詩ゝハ又新しの句ともこ一変ふ
古き句ハ色こ所かゝきそこのこのよさ
世変ゝんまあまのかゝ世ゝ拙しきてやる
かゝしきハ人目と古ふいよまのハ古くあさ
ハあゝしきなや古地の変化とゝ古ゝ稚ハ
若き新しき時ものこ変ものこ変
新しきこ稚ふりといふい片脇くさ俳
別

若ハ世ハ詩とゝ稚ゝ又こる是ゝ俳ふ事ふ

行乃休ま浦ちゝと渋谷のむかしをまとを
るやとこえぬくてわかれさくらのさの山
徐り出りのいお秋をおしまむ
渋谷の柿よとぬしつく発句

名残

一つの仕事や梅を境とわ　泳青
風の名をきそし涼しや小鳩
一谷の水ひ杉を秋みりたゝり越
峯の花はこゝろ迎てや初さあり　海人

幸ものいひ給へ人になる胡蝶かな
新秋の弁の水やさす月の雨　不流
ちるなれはふりや深き木の色の屋
山休のさやそのよ瀧様
ふかや能きも花もしきよ秋
渋園寺くそろらい佛の花　去指
行暇をてらし寺るや東の月
蝙蝠のかりや梅を凌る越
朝や波を名りれあいのかお　胡桃
ちりさきかきご庵の神や繹の夢　启之

名月や池をさいかいに月なし　凡繁

雲のうかれ来て柳ちる　凡繁

蚊の声の海に成る庭の萩

二三滴はらはらと萩の上　野力

又来るとしらせ顔なる雁

一点の白き色なる雁　温凡

水海の神に仕へ給ふ

敦賀津

此津に来たれの入江に浦あり凡碧

地名に法師ヶ浦とふ所あり事なれば此所歌

七月廿八日　名月や月の光の浦

名月八つ過ぎ　この浦

杉井立

指もの見つる唐崎の

敦賀

此地に仲哀天皇の行宮の跡あり

人丸塚も月日貝と云ふ所あり

かの人丸の歌此辺のものあり文字

より古人の格式をうけたり字あまりの字余
ここのてにはあまりさきに二句の病ありとかく
かるるゆへ人のいつはりごとといふいはれかの人のいへる
ことくたゞしくは格別に遠くとも坊日記には
書物の古式をしらぬ俳諧はなく格の古格を
よくしらぬ時のよく見しあるところ古人の二句と
いふ事はさまざまにいひ古き格はといふ時は二句を置
後の連歌には口をふさぎよりて理論あり連歌は古人いは捨て
歌は昔あるから中まれにといふ時は二句とそしたり
さまある所もかる也と句かならず已上格として古人の

さらしの二句を格は正しき事のならぬといふ人をた
式より二句を連しいかし入るは初物を初とせり
ともいへるといふは八卦には離坤兌乾坎艮震
巽とあるを易には乾兌離震巽は坎艮坤下は
あるは文字にたる一句をさらし格別をはかりよき
もはかりてあきらかに時代のならぬの事なり
一古人の格式を和歌の人々もしらん中品
以上の俳諧は歌より歌よりも格は二字
一句の字を文も入つかたれ字文は増字なり
ちやくのかなといふならぬといふ事は是に替されて

石深

年移り節もかはるとて　素花

うしあんくかの雅なる　東吾の袖

翡翠のそこくに　水のと　真子

ねこそのかしすつくに　雲さい

石動

遇重陽

金澤

海の月

ゆくあくにはゆるも打ふる月

八月十九日十三夜句しゐ沖の名残とも

孤客ふこゝあ孤客八人ものく月の雲

雲をとゝ乱時く飯中八仙のあらそ

事あるく酔中の無を求もるふ井の一字浮

酔の一字浮白三三秋のもとのつ

井

竹雲く沖のうとしむ秋時雨　小枝

枝

雲雲時の雲雲く指を枝乱　秋坊

新

[illegible]稲酒のいしさや泉の辞から　従吾

元

[illegible]　牧臺

[illegible]酒の[illegible]　拾貝

唐韻

市中[illegible]酒[illegible]　蘆

琵琶

[illegible]律[illegible]　万子

[illegible]

大聖寺

[illegible]策非の酒のよ[illegible]山中[illegible]

[illegible]の[illegible]山中の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]の山[illegible]

西[illegible]関

惟[illegible]

水音亭

此法師しか〻新作のふる〻結句の事の
なりあるはまたて光雅卿か
さらて光雅といふ人のそあらの新作又
はのうあ此物語の乃さうしをて世情の能と
なる事とも拾ふ俳諧も又さまものて

当の坐のやさしもよても秋の月

京新作の〻〻中の人とと
風雅の為らも新の
ゆきしいと乃拾ふ

永逝〻〻さうやとあきの秋

日、松山 吟奉無彩

ひとりとは世中あけてるるの如

胡全本名古全
今以月双古

月をあるる又さよるも之国川

西行

風雅ふるとも分風雅〻人のうたの新
とは乃一句は曲芸を求む法師の世をのり
物を附句ふ世を乃りとい一と自賛の句五七句

[illegible]

浦山しき心の浄るのうつくしまるる

清らかなるにしたがふる

菜を無心の名句といふべし旅する人の心

二月三日紀行の句なり海を渡り

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一句作

[illegible]

[illegible]

一句味

[illegible]

[illegible]

此句は一句独立の一句也人をいふ句

所句ハ[illegible]句なれども物の様ハ行

かと自在なる物の様を[illegible]

[illegible]味を[illegible]味[illegible]

立花とられてよきしれこゝろ面子おもふ手成
あら波ちさの穂しは浮る浪うよしやらう

谷緑

はつ音の穂や合点くしと飴の秋　水音
捨られてともなんぬしのみて稼ふ
立さき香り鼻にこれも四枇杷の京
久しやとはふ人あまり山住くし　胡全
次の日あかししせは立ち織
全ちはの惜とみえ秋なり
妙りの笠は塩もりて出よ石りくれ　昕嚢

林席田や子稲桂出れ立斎　形り
喉おの勝ちちつまる来とあみれ　布留
小滝のいちこと流る子前に書
也梛やにかへわく案内の稲
立川のとよ川花谷の火燵れ
冬いさや鳥ゝ梅まさくつせ笑　琴之
寿其入の酒塩田しきせ味
おもり子や稿のその穂くれ相子あけ
秋の夜は鶏の霧のさし出れ
好風のはよる次や草の実　一閑

入形や柳ちらほら残る帆かけ船　知子

初蝶のかさなり飛ぶや小雨　寸松

二三十柳うねるうねるかな

うつろひとこしなさるる扇かな

初のもの和睦の鯛や稲荷山　芦風

猪丸の庵の時雨や足あとを皺

連歌師の笠に新しき秋の雲　柳芳

肩きねの沂水の仏堂　流水

そうそう稲さいく春や雪北斗

高野の寺にて紀伊国の名所　童蒙

宝暦のすかさし出る　福居

福居

和歌山

紀伊の中うの東の原あるれ

えんもきうう

暮の雪の奥見えわけ紅葉

雲宮山

北雲宮山を東北にひかえ塩の浦茅

ヶ崎の方の雲を見はら見ぬ川の川なる

菖蒲も見おくれ田家山荘をなく
まのあたりなるきのふや神なりけり五月
たゝしき実の発句ハこうたり一夜のおかり稲荷
いたるなりけり

こゝろ羅て鶯と成らん　梅の宮

九月尽

行もせて秋のことくを見る川

立冬

時雨ねハ雲も便なり六月

西信

ある人の曰附句の奇趣をとふ事にしは
つくり出すへからん法師か曰人のおもむきを案しつくる
奇趣の論ハおのつから出るさ発句ハ細指ハ年中を
ことかへ見附句ハ人と人のおもて對して相時に説
句となる一句一言にもその発句か本情をいひ出るなり
法師の曰東西に深流しては万の人に對する発句ハ
人此口をとらへするより見て理屈をなり見て
味人なり見て案弱に見之ハ思ひ病なりと教学
道を達ると云ハ大地の空大ならしむるハ別なしと
またハ折りハ次発句ハ新附句にもつる時ハ其合に

はたきくあうもあいかくなるもと毒くく
五よりもあんのさよりもをまるもと人の天然より
出しいはまりくあり此時しあり時くあり
時もあるとよさもあり此はんまいそんはまる
をくの所なるもるる時ハ此なるつもりてよりを
ぬいかくなるくもしと出て毒てあんのさけり
栗のくの程い未熟ものくさ行るもつる程と
初冬のはやより高かるくあの程ハ黒ぬ
さ事をもるくよりはるくるるなるをいくにハ
のかるくの程ハさすくをもの所なれい

とこやくのふおりくとわくくらくまいめ
あしくの程くの一句ハ花百をとくくをもの人生
銀酒るこの中うみくあの人生百ぬをもくく
ハよん十ぬハを程ものせもこ二十ぬをもうはんん
とをの程の酒ふきくるくさくしれをを人生
ハほさやるかしかあの人生百ぬをみ
をくハや程をことかいたくく前より程くく
かくるくん時を人生仲の男ハんとおく
ものくの一歳のあるより所ハ人のまをおく人の姫
をくなるくもしと人も毒くハおかまひ毒

打勢のくさあるうもりさまとの枝ゝの
ようさ今とゝ一座の人を法名てゝ始ること
はゝとをこしる枝ハ二さんの今をぬもくやゝの
ゝこゝをあゝ吉ゝの修接るつゝ枝と沼一枝
乃節ゝとゝ枝ゝ法ゝて知ゝ枝ゝかくいゝし
仏道の平せゝとゝ枝ゝ仏道
とゝ枝ゝ事ゝ家ゝ人ゝ此の事法を説の
人のかゝさゝゝ也ゝ

谷深

もゝ深ゝとゝる蕙の馬　松木

山門の入りとゝ枝ゝ沼一枝ゝ
沼ゝの斎ゝ枝ゝ
孫ゝ也ゝ枝ゝ母
清ゝゝ虹の枝ゝ　矢之
赤ゝゝ法ゝ
初鄭ゝ枝ゝ
枝ゝ枝ゝ
枝ゝ枝ゝ
沼ゝ仏ゝ神ゝ
廉ゝ也ゝ
仏ゝ

杉東

章吹

笠の火はかんかれさや露の中　祐子

きりぎりすの鳴くこえの思ひもよらぬ　元長

投げ入れの藤の花もうつろへる　洞雲

夕月や投げ入れの藤の花　元長

小菅清もよりの川ちどりなく　路光

唐櫛の歯のあらはれる朝ぼらけ　洞雲

きりぎりすなくや秋の独寝　普全

野の草や咲かぬ花のもとよ　祐之

猪垣のよりきの月ぞ　洞雲

笠の露とのうつろひぬる秋の雨　普全

雨はれぬ雲の飛ぶ山　順志

夏草やいせの海士の雨　祐之

炉びらきやきりぎりすなく寒

きりぎりすなくや山の人のゆくへ　祐之

稲の穂の出でぬ間の月の雨　由殘

永日の月のまんまや枯れぬ　元休

芝の秋ほのぼのと鶴の鳴く　一度

きりぎりすなくや秋はたそがれ　十歌

玉江の橋

新古今 俊頼朝臣 玉江にや芦刈舟の通ひ路の
一あし残る月の影かな 水言

并中

帳山寺

ふるさとの帰りまかせて帳山寺

妙国寺

三月廿四日 雨降 夕方

遠近立

ゆるやかにて物ゆるやかの月雨

田氏沙門堂 別号

神酒所のもとにて馬を繋

西行

水言曰 家かつ之ゆるやかの俗語なり

あらしちりて初瀬の山の桜花 十郎

初瀬を法華山と云 俗語八幡を

八こと此并中あり 已西

さくらもつてうゑ家をこの孫 俗語

を三種 法師曰 俗語のさくらもさ

語長の俗語八幡豊 俗語八幡うゑ

いと茅中の仏法ハ篇書をつかねハ昌
とゝ[illegible]さるハ古地の風俗の[illegible]一人の質乃
さゝひしあるゝ[illegible]ハ古新の新[illegible]法
をゝ[illegible]をの[illegible]をの[illegible]
はゝ[illegible]仏法の自在なるつきる西[illegible]の仏
[illegible]自ゆゝ事あるゝ仏法師ゝ[illegible]
ゝ事ゝ事ゝ[illegible]ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

谷源

世ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]の[illegible]雪[illegible]弱[illegible]雪　柳柳
[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]柳[illegible]
[illegible]一[illegible]柳[illegible]角[illegible]
八[illegible]の[illegible]柳の色　金蔵
[illegible]　白鳥
[illegible]の[illegible]
[illegible]水[illegible]柳[illegible]
[illegible]の[illegible]帳[illegible]の[illegible]　柳水
柳[illegible]
[illegible]の[illegible]の形　海丸

[illegible]　宗人
[illegible]の[illegible]柳[illegible]
[illegible]の[illegible]　可汲
[illegible]柳[illegible]
[illegible]　又ノ
[illegible]柳[illegible]
[illegible]雪
[illegible]時[illegible]　柳の中　柳容
[illegible]人[illegible]

新賀

思想亭

[illegible]

大[illegible]氏の[illegible]の[illegible]

[illegible]晴風[illegible]

[illegible]

[illegible]

西行

ある人曰、撰集抄に、御しほの海と云ふ所にて、
紀行あり。くるる中に、夏の月しろかく人の
しるべ、ありけるを、見て、雅の筆さうとも
と法師の曰、こゝに紀行に、
もしほ草、とのつゝ、雅、
て自由なる人とも、ふ自由なる紀行
百五十句、中、夏の句、三句、一つ、
を除いて、時、紀行、
実、あるべし、新しの海を海とも

の意味、あるべし、
新しさ、ふ、
うしは、句、
と、新、
のもの、新、
句、
よき事、
かの三句、
ありけ、
たる、人の、

[illegible]

[illegible]

[illegible]